

ベルクソンと否定の問題 (1)

—否定の否定⁽¹⁾

高坂 絢乃

はじめに

ベルクソンの哲学は、しばしば、直観により実在を肯定的につかむ哲学だと言われる。「否定的」なものを排除し、「否定的」なものによってではなく、肯定的に、無媒介に事物を捉えるのである。多くの研究者、そしてまたベルクソン彼自身も、実証的あるいは肯定的 [positif] に、実在であるところの持続を直観すること、それこそが(ベルクソン)哲学において重要な点であると述べている。ドゥルーズは『ベルクソニスム』等の初期のベルクソン論において、ベルクソンの「直観」は最も入念に練られた哲学の方法であるという見解を述べ⁽²⁾、また「否定なき差異の概念、否定的なるものを含まない概念に達すること、ベルクソンの最大の努力がそこにある」と述べている⁽³⁾。ベルクソン自身も、そして彼の研究者たちも、こぞってベルクソン哲学の肯定的な面を主張している。

そのようなベルクソン哲学とベルクソン研究のなかで、なぜ「否定」が否定的な扱いを受けているのか疑問を持つのは自然なことであると思われる。ベルクソン哲学において、なぜ「否定」が否定的に扱われるのか、どのような点において批判されているのか。こうした問いに答えることができれば、ベルクソン哲学のポジティブな面を安易に主張することはできないだろう。

そこでわれわれは、ベルクソン哲学における「否定」の問題の内実を明らかにしたいと考える。否定がなぜ批判されるのか、否定は全面的に否定されるべきなのか、実は不当な扱いを受けているのではないだろうか、という否定に関するさまざまな疑問に一定の回答を与えたいのである⁽⁴⁾。

ところで、ベルクソン哲学においてベルクソンによる目立った批判の対象となるのが言語である。ベルクソンの言語批判はよく知られたものであり、しばしば研究の対象ともなっている。

そして、もう一つベルクソン哲学に関してしばしば指摘されるのが、この哲学には「他者性がない」という問題である。

われわれが見るところ、「他者性」の問題は「否定」の問題と深い関わりを持ち、またこの二つの問題は、「言語」の問題にも関わっている。ベルクソンにおいて否定的または消極的な扱いしか受けていないこの三つの事柄は、互いに深く関係し合っているのである⁽⁵⁾。

否定の問題について考察を進めるうちに、他者の問題と言語の問題が現れてくるように、他者の問題も他の二つとつながり、また、言語の問題を考察する際にも否定の問題と他者の問題がつながり合っている。ポジティブな側面が注目されるベルクソン哲学において、これら三つの問題はその裏側に隠されてしまうことが多かった。われわれは、これまで否定的な扱いを受けてきたこれら三つを取り上げ、ベルクソン哲学のポジティブな側面だけでなくネガティブな側面も明らかにすることによって、新たなベルクソン解釈を提案してみたいと考えるのである。

この企ての最初の手続きとして、われわれはまず本稿で⁽⁶⁾、ベルクソン哲学における「否定」の基本的な考えを、『創造的進化』第4章のベルクソンの記述に沿って確認する。それによって、ベルクソン哲学において「否定」はどのような点が批判されているのかが明らかになるだろう。手順としては、まず第1節では、『創造的進化』(*L'évolution créatrice*)の第4章の「存在と無」という小見出しの部分を手がかりに、ベルクソンの「否定」批判について整理しよう。無、否定、無秩序に関する誤った考え方に対するベルクソンの批判が明らかになることだろう。絶対的な「無」の観念に到達できる、という誤解へ導く「否定」をベルクソンは批判するのであるが、この「無」と「否定」に関するベルクソンの否定観は最もよく知られている部分である。

次に、第2節においては、否定に関する誤謬とは別に取り出される、弁証法についての確認が主となる。弁証法はどのような点において「否定的なもの」であるといわれ、どのような点について批判されているのだろうか。弁証法の

否定的な要素と、批判される要素を明らかにすることができれば、第1節の否定と、第2節の否定（弁証法）の共通点が明らかになることだろう。否定を分析していくうちに、そこには他者の問題も絡んでくる。

本稿での作業を経た上で、われわれとしてはさらに進んで、1)「直観」に関わる「否定」についてのベルクソンの肯定的な評価の吟味、2)肯定的に評価される「否定」の具体例としての「反自然」と「抗議」との位置づけ、3)ベルクソンにおける「他者性」の問題の見極めを、今後、稿を改めて行うことを見込んでいる。

このように、手続きとしてまずはベルクソンが「否定的」に扱う「否定」概念を明らかにし、その例から漏れるものとして次に「直観的な否定」の考察を試み、概念の考察だけではなく現に働いている「否定的な力」をベルクソンの著作から拾い出す。ベルクソン哲学における「否定」を整理したうえで、そこで暗示されている他者性を救いだそうと試みる。ベルクソン哲学における棄却されるべき否定と、そうではない否定を精確に区別することによって、ベルクソンの否定の独自性も明らかになり、また他者と言語の問題についても、新たな展望が開けるだろう。

1. ベルクソンの「否定」——二階の肯定と社会的なもの

ベルクソンが「否定」について立ち入って論じている箇所として最もよく知られているのが、『創造的進化』第4章の「存在と無 [L'existence et le néant]」という小見出しの部分である。そこでベルクソンは「否定」について批判的に語り、否定的な価値づけのもとに扱っている。まずはその部分を確認しておこう。

ベルクソンは、『創造的進化』第4章の導入部において、根本的な二つの錯覚・誤謬について言及する。われわれの思考が陥る二つの錯覚とは、すなわち、「無」の觀念の錯覚と、「生成」の看過である。これらは、「知性は、行動が必要とするものに何よりも気を取られている」(EC 273) ために生じるものである。二つの錯覚のうち、後者を前者よりもより驚かされるものであると評価しながらも、「無」の錯覚も、「生成」の看過と同じ起源を持つものであるとし、前者

の錯覚の議論に入っていく。行動するために、われわれの知性は動くもの、たとえば持続や生成や運動などを、不動のものを介して思考しようとする。動くものを不動のものを介して思考することは、実践的には理に適っているのではあるが、しかし、本来の動くものの本性は失われてしまう。「生成」の看過をこのように分析しつつ、ベルクソンは「無」の観念に関する錯覚についても、「実践のために生み出された手続きを思弁に移すことから生じる」(EC 273)と述べている。われわれは実践的には「自分に欠けていると感じる対象を獲得すること、あるいはまだ存在していない何かを創造すること」(EC 273)をめざす。つまり、空虚から充満へと向かうのである。このように、空虚から充満へと向かう手続きを、行動のめざすところ、実践においてではなく、思考の分野に移行して用いてしまうために、「無」に関する錯覚が生まれてくる。

ベルクソンは、空虚に関して、外的なものとの内的なものを削除する二通りの場合を考える。外的なものとはつまり事物であり、内的なものとはわれわれの意識状態のことである。まず、人がなにか事物を消し去った場合、それがかつてあった場所にはもう何もなくなる。しかし、何もなくなったと見えたその場所には、なにか別のものがあるわけであって、たとえそれが空気であったとしても、絶対的に何も無いわけではなく、そこに「絶対的な空虚」が存在するわけではない。ベルクソンはそれを「私が語る空虚は、実は、これこれの特定の対象の不在でしかない」(EC 281)と主張する。つまり、絶対的な空虚ではなく、相対的な空虚なのだ。

次に、意識状態を消し去る場合を考えてみると、「私は自分を内側から知覚するのをやめるとき、必ず自分自身の外的知覚に逃げ込む」(EC 282)のである。

物質の空虚であれ、意識の空虚であれ、空虚の表象は常に満ち足りた表象で、分析の結果二つの肯定的な要素に還元される。一つは、判明であるにせよほんやりとしているにせよ、交代の観念で、もう一つは、感じられるにせよ想像されるにせよ、欲望もしくは後悔の感情である。(EC 283、強調はベルクソンによる。)

事物の消去や意識状態の消去を分析してみると、結局は、「自分が望んでいるもの」という特定のものの不在であり、その対象の不在の代わりに別の対象がその場所やその意識の内を占めていることを見逃しているのである。このよう

に、空虚は、交代の観念と欲望あるいは後悔の感情であり、「すべてのものの消失」という意味での、絶対的な無の観念は、自己破壊的な観念、疑似観念、単なる言葉だ」(EC 283)ということをベルクソンは主張する。

空虚に関する分析から、「すべてのものの消失」という意味での絶対的な無の観念は却けられたが、では、無の観念と否定との関係はどうなっているのだろうか。ベルクソンは、そこで肯定と否定、「全体」の観念と「無」の観念との関係について論じている。われわれは通常、否定を肯定と対になるものとして考えている。肯定を無際限に続けていくことで「全体」の観念を形成することができるように、否定を無際限に続けていくことで「無」の観念に達することができると考えている、とベルクソンは主張する。しかし、上記のような肯定と否定との同一視に対して、ベルクソンはわれわれが通常見逃してしまっている二点を指摘している。

[第一に] 人は次のことを見ていない。肯定は精神の完全な行為で、この行為は観念を構成するに至ることが可能である。それに対して否定は、ある知性的な行為の半分以上のものでは決してない。あとの半分は言外に含ませているか、むしろ、いつだか分からない未来に終わらせることにしている。また [第二に]、肯定が純粹知性の行為だとしても、否定には知性を越えた要素が入っていて、このように見知らぬ要素が侵入しているから、否定は特殊な性格を持つということが分かっているのだ。(EC 287)

ここで、ベルクソンは、否定を肯定と同列のものに見なしてしまうことに対する批判を行っている。「無」の観念を形成することができる人とびとが誤解をしている否定は、「全体」という観念に達することができる肯定と同列のものであると見なされている。しかし、それは誤解である。ではなぜ、われわれは否定を肯定と同列のもの、対になる概念として扱ってしまうのだろうか。上記でベルクソンは、われわれがある二点を見逃してしまっているがために、そのような誤謬が生じるのだと主張している。ベルクソンの議論に沿って、われわれが見逃してしまっている二点を整理してみよう。

第一の点、つまり否定が完全な一つの行為の「半分」でしかないという理由は、「明示されていない主張についての主張」ということであり、第二の点、つまり「知性を越えたものが入っている理由」が、「他者を前提とした対人論法に

なっている」ということである。

まずベルクソンは「(...) 否定するとは、つねにある可能な肯定を退けることであることを指摘しよう」(EC 287) と言って、議論を進めていく。

ベルクソンはここで、黒い机を見たときを例に挙げ、この場合に肯定することと否定することが、どのような事態であるのかを説明しようと試みる。黒い机を見たときに、「この机は黒い」と言って肯定する場合、われわれが見ているこの机について語っている。では、黒い机を見たときに、「この机は白くない」と言って否定する場合、われわれは一体何を表現しているのだろうか。われわれが黒い机を見て、「この机は白くない」と言う場合、われわれは黒い机を見たのであって、白いものの不在を見たのではない。このときにわれわれは、見ている机そのものについての判断を行っているのではなく、「それは白い」という判断に注意が向けられているのである。机そのものがどのようになっているかを判断しているのではなく、机が白いか否かという判断についての判断を行っている⁽⁷⁾。

ベルクソンは、否定は肯定と同様に、直接事物に向かうのではなく、肯定(主張)に対する肯定(主張)でしかないことを指摘する。

(...) 肯定 [affirmation] は直接事物に係るが、否定は、間接的にのみ、間におかれた肯定を通してのみ事物に向かう。肯定的な命題は、ある対象に向けられた判断を表現している。否定的な命題は、ある判断に係る判断を表現している。否定はそれゆえ、二階の [second degré] 肯定であるという点で、本来の意味での肯定とは異なる。否定は、ある事物について何かを肯定している肯定について何かを肯定する。(EC 287-288、強調はベルクソンによる。)

上記の引用で言われている肯定および否定の事物との関係、つまり事物に直接的に向けられているか間接的に向けられているかという関係は、さきほどの黒い机の例に当てはめてみるとどうなるだろうか。黒い机を見たとき、まず「この机は黒い」という肯定 [affirmation] は直接的に机という事物に向かうが、「この机は白くない」という否定は、間接的にのみ、間におかれた「この机は白い」という肯定を通してのみ、いま見ている机という事物に向かうのである。肯定的な命題つまり「この机は黒い」という命題は、机という対象に向けられた判断を表している。否定的な命題つまり「この机は白くない」という命題は、

「この机は白い」という判断に係る判断を表している。「この机は白くない」という否定的命題は、判断すべき机そのものではなく、「この机は白い」という判断に向けられた命題である。このように否定は、ある判断に向けられた判断、ある主張に向けられた主張であって、その意味において二次的なものであることがわかる。

精神の完全な行為である肯定は、直接に事物に係るのに対し、否定は否定と事物とのあいだにある肯定を通してやっと事物に係ることができるのだ。肯定は直接的であり、否定は間接的である。通常の意味での肯定とは異なるとはいえ、否定は「二階の肯定 [affirmation du second degré]」であり、ベルクソンにおいては肯定に還元されてしまう⁽⁸⁾。

「存在と無」という小見出しのタイトルが表すように、肯定と否定との問題は、存在の観念と無の観念との問題に関わるものである。いま見たように、否定は、ある肯定についての二番目の肯定として、従って、一方では事物との直接的な関わりから遠いものとして、他方ではしかし、事物との間接的な関わりの中にその真の身分を得るものとして、性格づけられた。かくてベルクソンにおいて、人が否定の徹底の末に見出すと想定された「無」は、肯定の連鎖によって最終的には「存在」に繋がれたものであることになり、ただその「存在」からの自覚されない遠い関わり故に、批判されるべきものとなるのである⁽⁹⁾。

このようにして、第一の点、つまり否定が、直接に事物に係るようなものではないという点で批判されていることが明らかになった。では、否定は実は二次的な肯定であるというこの第一の点が、どのようにして、知性を越えた要素が入り込むことによる特殊な性格につながってゆくのだろうか。この第二の点について詳しく見てみよう。

人が否定するときのふるまいの特殊な性格をベルクソンの記述に沿って確認してみよう。

人は否定するや否や、他人か自分自身に説教することになる。実在の話し相手にせよ、可能的な話し相手にせよ、勘違いをしているこの話し相手を非難して用心させるのである。彼は何かを肯定した。が、人は彼に、別のことを肯定しなければならないだろうと警告するのである（しかし、最初のものを取り換えるべき肯定を明示することはない）。この場合、単にある人とある対象が向き合っているのではな

い。その対象の前で、ある人がある人に話しかけ、反対しながらも同時に手助けしている。ここには社会の始まりがある。否定がめざすのは誰かであって、純粹に知的な操作のように単に何かをめざすのではない。否定の本質は教育的、社会的なものである。否定は矯正、いやむしろ警告する。もっとも、ある種の二重化によって、語っている本人が矯正、警告される人になることもある。(EC 288)

否定が矯正、あるいは警告を示すものであるとはどういうことだろうか。引き続き、黒い机を例にして、確認していこう。ある人が黒い机を見て「この机は白くない」と否定するとき、「この机は白い」と肯定した人に対して（実在の人物であれ可能的な人物であれ）、矯正あるいは警告を行っているということである。黒い机を見て「この机は白くない」と否定する人は、「この机は白い」と肯定した人に対して、別のことを肯定すべきであるということを警告している。ただし、ここではまだ「この机は白い」という肯定が「この机は黒い」という肯定に取って代わるべきである、ということまでは示していない。「この机は白い」という肯定が、なんだかまだ分からないけれども別の肯定に代わるべきであるということを示している。「その対象の前で、ある人がある人に話しかけ、反対しながらも同時に手助けしている」(EC 288)とはつまり、机を前にして、「その机は白くない」と否定しながら、「その机は白い」のではないのだから、別の（正しい）肯定（「その机は黒い」）をしなくてはならないということをはのめかしているのである。

否定に付随する「交代」の表現は一部の削除として現れることをバルクソンは指摘する。

第二項 [つまり、現実に存在するもの] が、第一項 [つまり、「ない」と言われている可能的なもの] の代わりにそこに置かれている、ということ主張する代わりに、人 [つまり、否定的言説を用いる人] は、第一項の方に、しかも第一項の方にのみ、最初からの注意を向け続けることになる。そして、第一項から抜け出すことなく、人は、第一項が「ない」と語ることによって、第二項が第一項の代わりに置かれていることを暗黙の仕方でも主張することになる [on affirmera implicitement. 暗示的に肯定することになる]。(EC 290)

第一の点を確認したときに、否定は主張についての主張であるということが明らかになったが、上記の引用では、第二項が第一項の代わりに置かれている

ことが、暗示的に主張されている点に注目しよう⁽¹⁰⁾。否定は、主張についての主張という、二次的で、ある行為の半分のものであり、そして、「交代」を明示的に表しているのではなく、暗示的に主張しているのである。

このような否定作用においては、机が黒いかどうかという問題よりは、「その机は白い」と誤って判断してしまっている人を正しいほうに導くことのほうが重要になっているように思われる。社会のなかでの、人びとの行為や実践的なものが問題になっているのだ。肯定という直接事物に向かう知性的な行為とは異なり、否定は実在的であれ可能的であれ他者をめざしているのである。そういう意味で、直接に対象に向かう肯定という知性的行為とは別に、知性的ではない要素、純粹知性を超えた社会的あるいは教育的な性格を持つのである。たしかにそういった点では、否定の本質は社会的であり教育的なものであるといえるだろう。

ベルクソンが指摘するように、否定はある知性的な行為の半分でしかないとなれば、残りの半分はどうなっているのだろうか。残りの半分は、未確定なままである。それにしても、残りは未確定なままであるとは、一体どういうことであろう。引き続き、黒い机を見たときの肯定と否定の例を用いて、確認してみよう。

黒い机を見て「この机は白くない」という否定的命題を述べる場合、「この机は白い」という判断は別の判断と取り換えられるべきである、ということを示している。「この机は白い」という判断ではなく「この机は黒い」という判断を下さなければならない、ということまでは示さない。この机が白ではなく正しくは黒であるということは、そのとき問題にはなっておらず、「この机は白い」という判断が別の判断に置き換えなければならない、という警告だけで十分なのである。「否定的な判断とはまさに、ある肯定的な判断を別の肯定的な判断に取り換える理由があることを示す [indiquant] 判断である」(EC 289) とベルクソンは主張する。繰り返せば、否定は直接事物に向かうのではなく、判断に対する判断である。最初の判断に対する二番目の判断は、最初の判断を下したのが自分であれ実在の他者であれ可能的な他者であれ、そこには事物と人（自分）との関係のみならず、事物を前にした人と人との関係が想定されている。そして結局のところは、「否定は、自分が判断する肯定の内容以外に内容を持た

ない」(EC 289) が故に「いかなる観念も否定から生じることはない」(EC 289) ということを経クソンは結論づける。

以上が、肯定とは異なり否定が特殊な性格を持つという点である。

要するに、否定は肯定とは異なり、直接事物に向けられる判断(行為)ではなく、事物とのあいだに立てられた肯定を介することによって成立するものである。直接事物に向かうのではなく、実在の人であれ可能的な人であれ、他者を想定しており、その他者に「その判断は誤りなので、別の判断に取り換えるべきである」と警告することになる。ここには事物(対象)と私という関係だけでは取まらない関係が現れてくる。肯定のような純粹知性の行為とは異なり、否定は誰か他者をめざしている行為であって、そこでは、先に見たように、「その対象の前で、ある人がある人に話しかけ、反対しながらも同時に手助けしている。ここには社会の始まりがある」(EC 288)。実はベルクソンにおいて、否定という行為は、ある意味では、社会を創始しさえするような重要な行為、人間にとって本質的な一行為だとも言えるのだ、ということのをわれわれとしては指摘しておこう。このように、否定を分析してみると、そこには他者性と社会性が浮かび上がってくるのである。

半分は知性的、もう半分は知性を超えた要素が入っている。その知性を超えた要素とは、先に確認した第二の点で明らかになったように、社会的あるいは教育的なものである。ここまでは、ベルクソンの議論に即したものである。さらにここで、知性を超えた要素として、社会的・教育的な要素のほかに、『創造的進化』で一貫して知性と関係づけられて論じられる「直観」を持ってくるとすると、どのような事態になるのだろうか。ここでもまた黒い机を例に挙げて、直観を組み込んだ議論を試みたい。

黒い机を見て、「この机は白くない」と言う場合、「この机は白い」という判断は誤りであるので、別の正しい判断に取って代わられるべきであることを示す。ここまでが知性の仕事であるとする。このときに直観はどのように働いているのだろうか。黒い机を見て「この机は白くない」と言うとき、「この机は黒い」という判断を持ってこないにしても、机が白いか否かという判断の下に、実際目の前に存在する黒い机を直接に見ているわけである。「この机は白い」という肯定的判断を知性が否定しつつ、直観が目の前にある黒い机を直に捉えて

いるのではないだろうか。あるいは、順番を変えるならば、直観がまず目の前にある黒いこの机を把握し、次に知性が「この机は白い」という肯定的判断に対して「この机は白くない」という否定的判断を下す。直観は「この机は黒い」という判断を下すのではなく言葉にせずとも机の黒さをそのまま捉えているけれども、否定の持つ社会的・教育的な性格によって、「この机は白い」という判断が別の判断に置き換えられるべきであるということまでしか示さない。否定の持つ社会的・教育的な性格は、(可能的であれ現実的であれ)相手に警告すること(あるいは暗示すること)までしか行わないのである⁽¹¹⁾。

われわれは、ベルクソンに沿って、否定がどのような行為であるのかを確認した。否定は、ある主張についての主張という意味で、ある一つの行為の半分のものである。事物に直接向かうことを目的としているのではなく、他者を前提としているという点において、知性を越えた要素、つまり社会的・教育的な要素が含まれているのである。

では、一貫して、ベルクソンは否定に否定的な態度を取るが、なぜだろうか。それは、ここまで説明してきたような否定が、「無」の観念を形成することができる、と人々が誤解してしまうためである。ベルクソンは、絶対的な「無」の観念を認めない。「すべてのものの消失という意味での、絶対的な無の観念は、自己破壊的な観念、疑似観念、単なる言葉だ」(EC 283)と主張している。『創造的進化』第4章の「存在と無」の小見出しの部分では、「存在の観念と対立させるときにわれわれが解する意味での無の観念が、疑似観念 [pseudo-idée] であると証明」(EC 277)しようとしており、その疑似観念によって引き起こされる問題も疑似問題 [pseudo-problèmes] であることを証明しようとしている。それに対して、部分的な無の観念については、その存在を認めており、部分的な無の観念は「主観的な側面ではある選り好みを、客観的な側面ではある交代を含意している」(EC 282)ことを認めている。

本節で確認してきたような否定というものは、肯定と同様に扱われてはならず、オリヴィエ・ムランが述べているように「実体的 [substantielle] 概念ではなく操作的 [opératoire] 概念」である⁽¹²⁾。否定という実体的なものがあるわけではなく、先に見たように、否定は肯定とそれに対する肯定との関係に解消されてしまうものである。『創造的進化』及び他の著作においてもベルクソンが一

貫して批判的な評価を下す、「無」（「空虚」）、「否定」、「無秩序」といったネガティブな概念たちは、「存在」、「肯定」、「秩序」といったポジティブな概念たちがあって、その上でやっと生じてくる操作的な概念である。前者の概念は、われわれ人間のように知性を持った存在にしか現れてこない概念である。ベルクソンの言葉を引用するならば、「思い出や期待の能力を持つ存在にとってだけ、不在はある」（EC 281）のである。さらにおもしろいことに、「残り、つまり無や空虚といった言葉で否定的に表現されるものはすべて、思考というよりも感情である。もっと正確に言えば、思考を彩る感情である」（EC 281）と彼は述べているのである。ただ知性的なだけの存在、思考するだけの存在というよりは、感情を持った存在に、無や空虚といった否定的なものが現れてくるのだ。知性的なだけでなく、感情的なだけでもなく、まさに「思考を彩る感情」を持つ存在、知性も感情もどちらも備わっている存在、つまり人間にこそ備わるのが否定なものであり、事物を直接にめざすのではなく、他者を前提としている側面を持つ。

2. 弁証法と直観

無の観念に対する誤謬と関係する否定をベルクソンは非難しているが、もう一つ、彼が批判している否定的な方法がある。それが、弁証法である。弁証法は、ある命題（テーゼ）と、それを否定する形の反対の命題（アンチテーゼ）、そしてそれら二つを統合した命題（ジンテーゼ）から構成される。弁証法は、矛盾、対立、つまり否定的な要素を含んでおり、そのためにベルクソンも弁証法に対しては批判的な評価を下している。ベルクソンの、二種類の否定に対する批判については、ドゥルーズも『ベルクソンの哲学』のなかで指摘している。「単なる限定という否定的なもの」つまり「無秩序とか非存在というような否定的概念」と、「対立という否定的なもの」⁽¹³⁾つまり弁証法的なものという否定的なものの二つの形態を区別している。この二つに対して、ベルクソンはなぜ批判しているのか。ドゥルーズは、「ベルクソンの批判は二重になっていて、否定的なものの二つの形態のなかには、質的な差異に対する同じ無視があることを非難する」⁽¹⁴⁾ことを指摘する。

では、実際にベルクソンが弁証法に対して、どのような評価を下し、どのよ

うな態度を取るのかを彼の著作のなかから明らかにしよう。

ベルクソン哲学の哲学者自身による要約としての性格も持つ『思想と動くもの』のなかには、弁証法との決別を表明した箇所が存在する。「注意を眠らせ夢のなかで錯覚を進ませる弁証法の技巧には別れを告げるのである」⁽¹⁵⁾(PM 72)と、われわれを錯覚に導くものとして弁証法を却けようとしていることがわかる。これは、弁証法との完全な決別宣言ではないだろうか。

では実際、彼は弁証法をどのように評価していたのだろうか。まずは、弁証法とは、ベルクソンの分類法から見たとき、方向性としては知性寄りなのか直観寄りなのか、あるいはまったく別の方向のものなのか、以下の引用で確認することができるだろう。

少なくともその部分のいくつかで直観によって生気を与えられていなければ、システムは長持ちしない。弁証法は、直観をテストするために必要であるし、直観が概念に屈折して他の人間たちに伝えられるためにも必要である。しかし弁証法は、たいいていの場合、自分を超えている直観の結果を展開することしかししない。実を言えば、弁証法と直観という二つの歩みは逆の方向に進む。(EC 239)

上記のように、弁証法は直観とは反対の方向に進むことをベルクソンは明示している。持続性のあるシステムに生気を与えている直観を試す方法として、そしてまた、他者に伝達されうるものとして、弁証法が必要であることは、たしかにベルクソンも認めていることが確認できる。純粹に哲学的なものとしてではなく、ある意味では人間の社会生活上必要なものとして、実践的なものとして、弁証法が必要であることは認められよう。しかし、弁証法が直観とは反対の方向に進むというのはどういうことなのだろうか。また、「自分を超えている直観の結果を展開することしかししない」とは、どういうことなのだろうか。以下の一節では、直観と弁証法との関係が説明されている。

観念同士を結びつけるための努力は、観念が蓄積しようとしていた直観を消失させてしまうものでもあるのだ。哲学者はいったん直観から弾みを受け取ったら、直観を放棄せざるをえないし、そうなったら、運動を続けるために、自分自身を頼りに次から次へと概念を取り上げざるをえない。(EC 239)

あるシステムにおいて、観念と観念とを結びつけようとする努力が、直観を消失させてしまい、そのために直観は哲学者に放棄されてしまう。そうなるとうとうと、もはや哲学者は、思考を進めるために概念に頼らざるをえなくなる。こうして概念を扱うことによって、哲学者は体系内において仕事を進めるのである。このように直観によってではなく、概念を扱うことによって思考することをベルクソンは何と言っていただろうか。既に出来上がった概念（ときにそれは実在にぴったりとは当てはまらない概念）によってあれこれと仕事を進めるのは知性の特性である。しかし、それでは実在（持続）を取り逃がしてしまう。

生命の流れのなかでの、知性と直観（知性と本能）の線に沿って、ある体系内での状態を観察してみると、次のように記述することができる。ある体系は、直観によって生気づけられているが、その直観自身は直観として体系の内部で長続きしない。

つまり、われわれがある対象を前にして、直観によって直接的に捉え、その対象にぴったりとあてはまる概念を作り出したとしても、ある体系のなかで概念同士を、観念同士を結びつけたり、実在を無視して概念間、観念間の操作を行うことによって、実在とは離れたところで勝手に話が進んでいってしまうのである。せっかく直観によって捉えた実在であっても、体系内で概念間の操作だけを重ねていくうちに、最初に受け取った生き生きとしたもの（エラン）は消えていってしまうのだ。体系の内部で、概念についての概念、あるいは概念同士を分析して作り出した新しい概念は、結局はその体系のなかで通用するだけなのであって、それを目の前の現実世界に戻すときには、それと合致するものは存在しないのではないだろうか。

以下の二つの文言から、弁証法の役割と、直観の役割をそれぞれ確認してみよう。

つまるところ、弁証法とは、思考が自分自身と一致するのを保証するものである。しかし、弁証法——直観の弛みでしかない——によって、相異なる数多く的一致が可能になるとはいえ、真実は一つしかない。(EC 239)

弁証法は、その体系の内部において辻褄が合うことを保証してくれる。

直観は、もしわずかな瞬間で終わらずに継続することができるなら、哲学者が彼自身の思考と一致するのを保証するだけでなく、すべての哲学者同士が一致することも保証するだろう。(EC239)⁽¹⁶⁾

ベルクソンが主張するように、弁証法が直観とは反対の方向に進むとするならば、それはどのようにだろうか。われわれがベルクソンのテキストに沿って、確認できていることから考えるに、つまり、知性と本能あるいは人間においては知性と直観という二つの傾向に沿って考察するとするならば、直観によって始められたシステムであっても、システムを維持し、そのシステム内で思考を続けようとする、どうしても概念同士の操作によって、直観が失われてしまう。直観を犠牲にして、実在を置き去りにして、概念と概念との関係、言葉によって言葉を表していく関係、そういったものをベルクソンは批判しているのである。ベルクソンの哲学において重要なことは何であったかを思い出そう。彼は、直に実在を捉えることをめざしていたのである。弁証法は、実在からだんだんと離れ、システムのなかだけで完結し、そのなかの概念の操作によって新たに概念が作られていってしまう。要するに、弁証法は、現実から抽出した概念を、その体系のなかだけで次々に概念を操作していくうちに、現実、実在から離れて、空虚な戯れに転じてしまいかねない、という点が批判されているのである。対立や矛盾といった否定的な要素を内に含み、現実には即していない弁証法が、ベルクソンの批判の対象となるのである。

おわりに

本稿では、ベルクソンの「否定」に関する一般によく知られている点を確認した。ベルクソンは『創造的進化』において、「否定」が実在を直につかんでいないという点で批判しているのである。しかし、否定が直接に事物に向かうのではなく、他者を前提とした社会的な行為であることも明らかになった。ベルクソンは、否定のこうした社会的な面においてはその有用性を認めており、「社会のはじまり」(EC 288)がある、とさえ述べているのである。つまり、「否定」は全面的に批判されているわけではなく、「否定」に拘るときに人がある仕方である実在を取り逃がしてしまう点、そしてそのことを見過ごすときに哲学的錯覚に

陥る点においてこそ批判されているのだ。

また、第2節の「弁証法」に関する考察においても、弁証法が対立や矛盾という否定的なものを含み、弁証法のシステムのなかだけで概念が操作されてしまうということについて批判がなされていることも明らかになった。

つまり、第1節と第2節から明らかになったことを考え合わせると、ベルクソンが否定的なものに批判的な態度を取るのには、それらが實在に即していないという点においてなのである。

以上、われわれは、ベルクソンが否定する否定がどのようなものであるのかを見た。これを踏まえて、われわれは次に稿を改めて、ベルクソンが肯定的な価値を認めている「否定」についての考察に移りたいと思う。

註

- (1) 本稿は、筆者の修士学位論文「ベルクソンと否定の問題——暗示する言語と他者——」（2015年3月、成城大学大学院文学研究科にて学位取得）の「序」と「第1章」に若干の加筆・修正を施し、一論文として体裁を整えたものである。

なお、ベルクソンの主要著作からの引用は、以下の略号とページ数とを以て出典を示す。また、主に参照した邦訳を〔 〕内に記す。

DI: *Essai sur les données immédiates de la conscience*, PUF, 2013 (1889). [アンリ・ベルクソン、中村文郎訳『時間と自由』岩波書店、2001年]

MM: *Matière et mémoire*, PUF, 2010 (1896). [アンリ・ベルクソン、合田正人・松本力訳『物質と記憶』筑摩書房、2007年]

EC: *L'évolution créatrice*, PUF, 2009 (1907). [アンリ・ベルクソン、合田正人・松井久訳『創造的進化』筑摩書房、2010年]

ES: *L'énergie spirituelle*, PUF, 2009 (1919). [アンリ・ベルクソン、原章二訳『精神のエネルギー』平凡社、2012年]

DS: *Les deux sources de la morale et de la religion*, PUF, 2012 (1932). [アンリ・ベルクソン、森口美都男訳『道徳と宗教の二つの源泉Ⅰ』『道徳と宗教の二つの源泉Ⅱ』中央公論新社、2003年]

PM: *La pensée et le mouvant*, PUF, 2013 (1934). [アンリ・ベルクソン、原章二訳『思想と動き』平凡社、2013年。河野与一訳『思想と動くもの』岩波書店、1998年]

- (2) Gilles Deleuze, *Le Bergsonisme*, PUF, 1966, p.1.

- (3) Gilles Deleuze, *L'île déserte et autres textes*, Editions de Minuit, 2002, p.59.
- (4) われわれはベルクソン哲学のポジティブな面にばかり目が向けられていることに疑問を抱いているが、むしろ、ベルクソンの「否定」に焦点を当てた研究も存在しないわけではない。たとえば、フランスにおいても、オリヴィエ・ムランの「ベルクソン：否定と精神の作業」(Olivier Moulin, 《Bergson: négation et travail de l'esprit》, *Annales bergsoniennes IV, L'Évolution créatrice 1907-2007: épistémologie et métaphysique*, PUF, 2008.) や、日本国内においては、「ベルクソンにおける自由と直観について：『働く』時間と否定の力を通して」という平野一比古の博士学位論文(平野一比古「ベルクソンにおける自由と直観について：『働く』時間と否定の力を通して」大阪大学リポジトリ、<http://hdl.handle.net/11094/23079>、2012年) など、否定や無に関する研究論文は存在する。(他にも、*Annales bergsoniennes IV, L'Évolution créatrice 1907-2007: épistémologie et métaphysique*, PUF, 2008. 所収の Florence Caeymaex や Yala Kisukidi による論考など。) だが、このようにして否定やそれに関わるものである無に関する研究はなされてはいるものの、否定の持つポジティブな力について体系的に考察されているものは少ない。また、杉山直樹の『ベルクソン 聴診する経験論』(杉山直樹『ベルクソン 聴診する経験論』創文社、2006年) が日本における代表的なベルクソン研究の一つとして挙げられるが、そのような優れた研究においてさえ、「否定」を主題として扱っていないのである。

そこでわれわれは、これらの先行研究も十分に参考にしつつ、ポジティブな面ばかりが強調される現在主流なベルクソン解釈へ抗議し、否定に関する詳細な分析を試み、他者性と言語批判にも切り込むことによって、従来のベルクソン解釈にはない、新たな展望を開きたいと考える。

- (5) これらの関係を解くにあたっては、ベルクソンが折りに触れて言及する「暗示[suggestion]」の概念が導きの糸になるとわれわれは考えている。「暗示」はまた対他的性格を持つ「言語」のある「否定」的な機能としても理解されるからである。そこでわれわれは、別稿にて、否定の問題を考察する際に現れてくる他者の問題と言語の問題についても解明を試み、そのうち言語に関しては特に「暗示」という問題に注目して考察してみたいと考えている。
- (6) 先註に述べた通り、本稿は筆者の修士学位論文の第1章までにあたる論述で終わるが、第2章以降に関わる見通しのみここに提示しておく。
- (7) Cf. EC 287-288.
- (8) この点については、ジャンケレヴィッチも次のように指摘している。「(...) 否定もまた措定 [position] であって、しかも二重の措定なのだ。(Vladimir Jankélévitch, *Henri Bergson*, PUF, 1999 (1959), p.246. [V.ジャンケレヴィッチ、阿部一智・桑田禮彰訳『増補新版 アンリ・ベルクソン』新評論、1997 (1988初版)、334

頁。)]「否定 [négation]」は「肯定 [affirmation]」と対に用いられる場合もあれば、「措定 [position]」と対に用いられることもある。ここでは、ベルクソンの「肯定 [affirmation]」に対して、ジャンケレヴィッチは「措定 [position]」を用いているが、否定が結局は肯定で言い表されてしまう、という点では両者に相違点は見られない。実際ベルクソン自身、『創造的進化』第3章の「無秩序の観念」の小見出しの部分では、「一方の否定が他方の措定 [position] であることを、彼は忘れていたのである」(EC 233) という表現で、否定と措定とを対概念として扱っている。

- (9) メルロ＝ポンティの講義ノートのなかには「(...) 無の観念は、〈存在〉観念から狩り出されるというよりも、むしろ〈存在〉観念に組み込まれることになる」という指摘も見られる。(Maurice Merleau-Ponty, *La Nature. Notes. Cours du Collège de France*, Seuil, 1995, p.79.)
- (10) 稿を改めて論じる「暗示」は suggestion というフランス語であり、本節で「暗示的」と訳している語は implicite であるが、どちらも日本語ではふつう「暗示」として訳され、意味も共通な部分を持つことを註記しておく。
- (11) 否定の社会的・教育的な性格による、交代物を暗示させるような側面に通じるものとしては、ベルクソンが書簡 (Henri Bergson, *Correspondances*, PUF, 2002) のなかで、言語と暗示 [suggestion] について注目すべきことを述べているということ为先取りの指摘しておこう。先註でも少し触れたが、言語と暗示に関する考察は、別稿で展開する予定である。
- (12) Olivier Moulin, 前掲書、p.412。(強調はオリヴィエ・ムランによる。)
- (13) Gilles Deleuze, *Le bergsonisme*, pp.40-41.
- (14) Ibid., p.41.
- (15) ベルクソンの言語批判を論じる際にも引用されることのある箇所である。(cf. 三宅岳史「ベルクソン哲学における言語の消極性と積極性」『哲学論叢』2002年、32頁。)
- (16) ここで述べられている、自分自身の思考のみならず、他者 (の思考) とも一致できることが、直観の特徴であるといえるだろう。「直観」と「一致」ということで思い起こすのは、『思想と動くもの』の「形而上学入門」のある一節である。直観による自分自身との一致という観点からすれば、「形而上学入門」では、直観によって少なくとも把握できる事象として、自分自身の人格が挙げられている。

われわれが誰でも内から、単なる分析によらず直観によって把握する事象が少なくとも一つある。それは時間を通じて流れていくわれわれの人格である。持続するわれわれの自我である。われわれはそのほかのいかなるものとも、知性的にむしろ精神的に共感しないこともありうる。しかし、われわれは確かにわれわれ自身とは共感する。(PM 182)

こうした直観の力を考えてみると、「形而上学入門」においては、少なくともわれわれはわれわれ自身の人格と共感することができる、と述べられている。だが、「そのほかの」ものとの共感の可能性も否定されていないのであって、実際、弁証法と直観について論じられる文脈では、直観によって、ある哲学者が彼自身の思考との一致のみならず、他の哲学者同士が一致することも可能である、と述べている。

上記の引用について、よく読まれている邦訳の一つでは、このくだりは「われわれはそのほかのいかなるものとも、悟性的にむしろ精神的に同感することはできない」と訳されているが（河野与一訳『思想と動くもの』岩波書店、1998年、254頁）、これはベルクソン解釈の根幹に関わる深刻な誤訳である。「共感しないこともありうる」というのは、むしろ、共感することが十分にありうるからである。